



W-BRIDGE

‘09 年度活動報告

09

W=BRIDGE

Waseda-Bridgestone Initiative for Development
of Global Environment



Message

地球環境保全のための「架け橋」を目指して

早稲田大学とブリヂストンが連携して進める「W-BRIDGE」は、環境問題という人類共通の課題に対し、産学連携に加え、環境 NGO や市民団体といった一般の生活者の方々にも参画いただき、三者一体で研究・活動を行える枠組みを提供するプロジェクトです。企業と大学の連携に、地域の生活者との連携をプラスして、二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援していくことを目的としています。

2008 年 7 月のスタート以来、のべ 22 件のプロジェクトを支援してきました。研究者と市民そして学生の間に架け橋をわたして、ともに地球環境を守るための研究・活動をすすめています。世界的な業績を上げた研究者や著名な NPO 活動者から、それぞれの地域で生活と環境を守っているみなさん、未来への希望に満ちた学生まで一緒に手を携えて行動をしています。ちょっと照れくさいですが、地球とみんなの「しあわせ」を目指して。

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment) は早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトです。

株式会社ブリヂストンが定めた 4 つの領域

1. 地球温暖化対策と生物多様性保全のバランスを考える
2. 人々の生活と環境保全活動のバランスを考える
3. 次世代からの視点で目標を定め、効果的で効率的な環境改善手法を考える
4. 環境に関する情報を世界へ効果的に発信し、コミュニケーションする手法を考える

の中から 1 つを選んで、早稲田大学および早稲田大学の提携校等に所属する研究者と民間団体などの連名で応募いただき、助成審査委員会の審査を経た案件に対して、早稲田大学環境総合研究センターから研究・活動を委託しております。

また、研究・活動を支え、情報を発信する活動も併せて行っています。2009 年 11 月 1 日現在、のべ 22 件のプロジェクトが採択されており（うち 4 件はすでに目標を達成して終了）対象地域もインドネシアから早稲田の町内会まで、研究代表者も早稲田大学、慶應義塾大学、茨城大学、山梨大学、国際研究機関まで、民間団体も海外の NPO から、商工会、地域団体、ジャーナリスト団体など多様な広がりを見せています。

本レポートの内容は W-BRIDGE プロジェクトの第一期の活動の概要を表したものです。詳細は、www.w-bridge.jp をご覧いただくか、W-BRIDGE 事務局（裏表紙に記載）までお問い合わせください。



ご挨拶

早稲田大学は、環境分野においては、理工学系と人文社会科学系が協働して問題に取り組むことが重要であるとの認識から、学問領域統合型のアプローチを旨とする環境総合研究センターを設置して活発な研究展開を行うとともに、大学院環境・エネルギー研究科を設置して、時代の課題に応えた大学院教育を展開して参りました。

株式会社ブリヂストンでは、企業理念におけるミッションの一つとして「地球環境の保全に貢献」を掲げ、かねてから経営の最重要課題の一つとして「環境経営活動」を積極的に実践して参りました。具体的には、生産事業所の環境負荷軽減、環境対応商品の開発・販売やリトレッド事業の展開等の本業での環境活動に留まらず、社会貢献的な活動を含め、網羅的で多様性のある「環境経営活動」をグローバルに展開して参りました。

そして双方は、日々深刻化する地球環境問題解決の道筋を明らかにするという、企業および大学の社会的使命を果たしていくためには、従来の企業と大学の連携の枠を超えた、人々の生活により近づいた取り組みが必要だと考え、当プロジェクトをスタートさせました。



写真上：大隈庭園内田んぼ「わせでん」

地球環境問題は、人類、ひいては全ての生物に関わる問題であり、その解決のための研究は、地域に生活する人々を巻き込んだ実践的なものでなければなりません。本プロジェクト設立の意図は、生活者としての一般の人々にも参加していただけるような新しい枠組みを提供するということです。

W-BRIDGE は、地域で実生活に根ざした活動をされている人々やNPOやNGOと産と学とが、ともに課題解決に取り組んでいく、そういう三者連携の新しい枠組を提供することにより、地球規模の問題解決や持続型社会の実現に貢献していきたいと考えます。また、得られた成果は広く世の中に発信し、多くの方々に活用していただけるようにしていきたいと考えます。

皆様におかれましては、当プロジェクトの趣旨をご理解いただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

代 表 堀口健治
代表代行 堀尾正韜
副 代 表 平田 靖



写真上：インドネシア・ロンボク島「アブラギリ植林地」



「地球規模の多様な 環境問題解決の架け橋」

(地球温暖化対策と生物多様性保全等の連携の
道筋を開拓)

この領域は地球温暖化対策と生物多様性保全のバランスを考えることを目的としています。

荒廃地における森の再生

＜研究・活動名＞荒廃地の緑化によるCO₂吸収とバイオ燃料生産の実証的研究

＜代表者／団体＞早稲田大学人間科学学術院教授 森川 靖

(財)国際緑化推進センター

世界的に、通常の植林活動では地域住民の継続的な便益がなく、植林地が持続しない例が多いなどの限界や問題点が明らかになっています。

そのため、本研究・活動ではインドネシア・ロンボク島において、地域住民への便益効果と、樹木によるCO₂吸収、バイオディーゼル使用による化石燃料代替効果を定性的、定量的に把握し、経済面・環境面から最適な荒廃地利用システムの提案を行います。それが、農耕困難な荒廃地の緑化、地域住民への持続的利益に広く普遍化され、他プロジェクトを実施する際の具体的な指針となると期待しています。

バイオ燃料の持続可能性を探る

＜研究・活動名＞バイオ燃料の持続可能性評価に関する研究

＜代表者／団体＞早稲田大学高等研究所助教 齊藤 修

NPO法人バイオマス産業社会ネットワーク

バイオ燃料導入を契機とした大規模プランテーションの増加による環境問題・地域問題への影響が世界的に問題になっています。

プランテーションの持続性に関する情報を集約し、今後の温暖化対策と生態系保全に関する議論の基礎資料とするために、マレーシアのサバ州、サラワク州で、パームオイルプランテーションにおけるRSPO(持続可能なパームオイルのための円卓会議)認証の浸透状況、生物多様性への影響、住民との土地問題などの最新状況、日本企業進出の影響について調査を行いました。その結果、プランテーションの持続性確保のためには、地域住民との共生が重要な課題であることが明らかとなりました。

右ページ写真 上左：ロンボク島の人々と(森川プロジェクト)
上右：調査風景(森川プロジェクト)
中央：発芽の様子(森川プロジェクト)
下左：マレーシアでの実地調査(齊藤プロジェクト)
下右：現地の人々へのヒアリング(齊藤プロジェクト)



W-BRIDGE へのメッセージ



「環境はすべからく地域の問題である」といわれます。世界、日本の各所とそれぞれに異なった様相で、環境的課題が生まれます。ですから真の問題解決は、地域で地域の住民によってでしか達成できません。最近になって従来型の、分野で区切られ、その中で精緻化を求める従来科学の反省として Sustainability Science の考え方こそ社会における科学の新しい方法であるとの流れが出てきており、将来主流になると考えられています。

W-BRIDGE プロジェクトは、まさに今の世界で養成される科学を実地に進めるものとして大きな意味をもつものです。大学の知と住民の行動の組み合わせで社会改革をボトムアップで実践するというユニークな試みを見守っていきたいと考えています。

国立環境研究所特別客員研究員 西岡秀三さん

W-BRIDGE のロゴデザインを拝見したところ、このWとBの間に秘かに二重橋がかかっていることに気づきました。この二重橋の意味が相当に大きいことなのではないかと思われ、素晴らしいプロジェクトになり得るのではないかという期待感を持っています。

ブリヂストン、早稲田大学といった世界的に著名でそれぞれの歴史を持つ、この両者が協働した横断的なプロジェクトで、かつ市民の方々も引き込んでいくという壮大なプロジェクトということにも、驚きを隠せません。

W-BRIDGE で取り組む環境問題は、まさに多様性に富んだものであって、理論・研究だけでなく一つ一つの実践がベースになるものだと思います。市民の方々も交えるということで、企業と大学の連携が、一人一人の生活者の中に何か芽生えるものになっていくようなプロジェクトになることを期待しています。

(株)NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー
松尾典子さん



★第1領域、第2領域の新規採択案件

以下の4つの研究・活動が2009年7月から新たにスタートしています

第1領域：2件

- Eco-certified Natural Rubber from Sustainable Agroforests in Sumatra, Indonesia
(ICRAF・Dennis P. Garrity / KKI-WARSI)
- 地球温暖化対策を念頭においた総合的な森林利用の方向性を探る研究
(慶應義塾大学大学院・金谷年展 / NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク)

第2領域：2件

- 地域連携で生み出すいばらきエコ・ネットワークによるまちづくり
(茨城大学・田村 誠 / 城里町商工会・筑西市明野商工会エコの木プロジェクト)
- 「農と食と緑の学校 in おけら牧場・ラーバンの森」の実践と研究
(早稲田大学・柏 雅之 / WAVOC 公認プロジェクト「農と食と緑の学校」)

W-BRIDGE の活動

W-BRIDGE では、各研究・活動の活動以外にも、地球環境問題に関連する様々な講演会や研究会などを開催しています。

今年 6 月 22 日には W-BRIDGE 公開講座として国立環境研究所地球環境研究センターの山形与志樹主席研究員から、「中長期的な温暖化対策の必要性和 C O P 15 の意味：科学と政策」と題して、I P C C（気候変動に関する政府間パネル）の温暖化に関する最新の科学的知見を中心に、

- 2050 年までに温室効果ガス排出を 50%削減することの意味
- さまざまな温暖化対策のポテンシャル
- 日本の中期目標の設定の概要
- 持続可能な都市・地域づくりによる先進的な温暖化対策の実例

について、ご講演いただきました。地球環境問題に関する最先端の話をわかりやすくご説明いただき、地域の皆さんや学生、教員などが熱心に聞き入っていました。



バイオマスの持続可能な利用について

バイオ燃料の利用は、地球温暖化対策などを目的として世界的に取り組みが始まっていますが、拡大するにつれ、森林などの生態系、地域社会などに大きな影響を与えることが明らかとなっています。

2008 年 1 月にサイエンス誌に掲載された論文によると、森林など土地利用転換にともない、多量の温暖化ガスが排出されることが示され、バイオ燃料生産による温暖化対策効果に大きな疑問が投げかけられました。

また、中国・インドなどでの食の高級化や投機資金流入に加えて、米国のエタノール推進政策がトウモロコシ価格上昇の要因となり、アフリカなどでの食糧危機の一因となったと指摘され、2008 年 6 月に食糧サミットが開催されました。続いて 7 月の G 8 洞爺湖サミットでは、持続可能なバイオ燃料の基準についての議論を深めることで一致し、基準策定作業が進められています。日本国内においてもこうした状況に対応するため、経産省が 2009 年 1 2 月をめぐりにバイオ燃料の持続可能性基準を策定中で、来年から本格的な対策が始動することとなります。

経済産業省バイオ燃料導入に係る持続可能性基準等に関する検討会委員

NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク 理事長 泊みゆきさん

第2領域 (その1)

「いかしつ守る環境活動者のグローバルな架け橋」

(持続的な人間活動と環境保全活動にかかわる人々の共通の理解と連帯の形成)

この領域は人々の生活と環境保全活動のバランスを考えることを目的としています。

地域の人々と学生の交流からごみ問題を考える

＜研究・活動名＞マレーシア移民集落における衛生環境改善のための環境認識研究
と学生ボランティア活動

＜代表者／団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 岩井雪乃
WAVOC主催「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト(ボルネオ)」

マレーシア・サバ州・コタキナバル市において、急増しているフィリピン人移民集落でのゴミ堆積問題に対して、その改善のため4つの研究・活動を行っています。

- ①民族固有のゴミを含む環境認識のあり方及びゴミに対する行動選択の過程の解明
- ②ゴミ問題の改善を通じての移民集落の衛生環境と海岸環境の向上
- ③ゴミ問題に対する協働を通じてのサバ人と移民の関係改善
- ④マレーシアでの活動体験から「幸せ」を問いなおすメッセージを日本社会に対して発信

ごみの島から「人のつながり」の島へ再生

＜研究・活動名＞瀬戸内海・豊島をモデルとした自然環境・地域再生研究プロジェクト

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科助教 切川卓也
豊島学(楽)会

戦後最大級の不法投棄事件が発生した瀬戸内海の“豊島(てしま)”をモデルとして、自然環境と地域再生に焦点を当てた研究を展開しています。

島が本来の姿で活力に満ちた姿を取り戻し、かつ自然の回復が併せて行われることを目的として、主に地域産品流通システム、市民活動型の簡易環境計測システムの開発、豊島共創グリーンマップシステムの構築を目指しています。

右ページ写真 上(3枚): マレーシア現地での活動風景(岩井プロジェクト)

下(3枚): 瀬戸内に浮かぶ豊島(てしま)の風景と活動(切川プロジェクト)



W-BRIDGE

プロジェクトマップ

森を考えるプロジェクト

「荒廃地における森の再生」
インドネシア・ロンボク島 (p5)

「バイオ燃料の持続可能性を探る」
マレーシア・サバ州 (p5)

新規プロジェクト

「持続可能なゴム園」、「森林政策を考える」 (p7)

世界への情報発信を 考えるプロジェクト

「日本の持続性の知恵を世界に」 (p19)

「環境と日本を考える」 (p19)



都市環境/環境経営を考えるプロジェクト

「地域住民と共に創る サステナブル都市新宿」(p15)

「学生が未来のエコビジネスを開く」(p15)

新規プロジェクト

「排出量取引研究プロジェクト」(p18)

*プロジェクト名は略称です。

詳しくは各ページをご覧ください。

地域連携/農を考えるプロジェクト

「大学と地域と農のネットワーク」
埼玉県本庄市 (p13)

「農業と農村の持続的発展を考える」
早稲田大学周辺 / 千葉県鴨川市 (p13)

新規プロジェクト

「農と食と緑」、「いばらきエコネットワーク」(p7)
「じょんのび」(p18)

ゴミと海を考えるプロジェクト

「地域の人々と学生の交流からゴミ問題を考える」
マレーシア・コタキナバル市 (ボルネオ) (p9)

「ごみの島から『人のつながり』の島へ再生」
瀬戸内海豊島 (てしま) (p9)





第2領域 (その2)

「いかしつ守る環境活動者のグローバルな架け橋」

(持続的な人間活動と環境保全活動にかかわる人々の共通の理解と連帯の形成)

この領域は人々の生活と環境保全活動のバランスを考えることを目的としています。

大学と地域と農のネットワーク

＜研究・活動名＞学生と地域市民で取り組む地域バイオマス活用による循環型社会の研究・実践

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 紙屋雄史
NPO法人早稲田環境市民ネットワーク

地域の里山や農業の課題に大学が取り組むことで、新しい地域との関係創造につながる社会モデルを構築するために、埼玉県本庄市に大学キャンパス周辺の実習農場を整備し、地域のバイオマスを活かした農業を実践するとともに、実験的なエネルギー作物の栽培や、地域の希少種の保全などの活動に学生の参加、環境教育の機会を提供しています。

農業と農村の持続的発展を考える

＜研究・活動名＞農業と農村の持続的発展を考える（研究する）プロジェクト

＜代表者／団体＞早稲田大学人間科学学術院教授 柏 雅之
学生NPO農楽塾

普段日常生活の中で土や農業というものに触れることの少ない都市部の人々にその土と触れ合う機会を提供して考えてもらうために、

- ①大隈庭園で稲を栽培することにより、実際に土に触れてもらう
- ②バケツ稲を大学付近の商店会に配布や、近隣の幼稚園児への農作業を体験の提供など、地域との交流を図る
- ③農作業体験を通じて日本の農業の現状を学ぶため、国内の農村の訪問を行う
- ④学生の積極的な活動を引き出すため「泥んこバレー大会」の開催とその効果の分析をする

などを行いました。

右ページ写真 上下：早稲田農楽塾の活動（柏プロジェクト）
中：早稲田環境市民ネットワーク（紙屋プロジェクト）



アドバイザー・ボード

W-BRIDGE には本プロジェクトの趣旨にご賛同いただいた各界の専門家から構成されたアドバイザー・ボードが設置されています。研究領域・研究成果に対して随時助言をいただき、活動内容に反映しています。

(敬称略、五十音順)

- 池上清子 (環境と開発途上国問題の専門家)
- 大橋 力 (文明科学研究所長 / 芸能山城組主宰)
- 小畑秀文 (東京農工大学長)
- 白井克彦 (早稲田大学総長)
- 西岡秀三 (国立環境研究所特別客員研究員 / IPCCメンバー)
- 原 剛 (早稲田環境塾塾長)
- 松尾典子 ((株)NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー)
- 三村信男 (茨城大学教授 / IPCCメンバー)
- 渡辺弘之 (京都大学名誉教授)



第3領域

「たしかな未来への たしかな架け橋」

（中長期目標設計とバックキャストिंग手法によるアクション設計）

この領域は、次世代からの視点で目標を定め、効果的で効率的な環境改善手法を考えることを目的としています。

地域住民と共に創る「サステナブル都市新宿」

＜研究・活動名＞“早稲田発”サステナブル都市「新宿」における地域共創型の温暖化対策推進に関する実証研究

＜代表者／団体＞早稲田大学環境総合研究センター准教授 小野田弘士
新宿区エコ事業者連絡会

都市部における温暖化対策の具体的な方法論をモデル的に提示することと、早大生をはじめとする地域市民のエコマインドを醸成し、率先実践型の人材を社会に輩出する基盤の構築を目標に、新宿区エコ事業者連絡会、早稲田大学の学生が、早稲田大学が保有する省エネ・省CO₂技術を活用して大学構内の自販機改良とその活用を中心に省エネ・省CO₂活動を進め、その手法の研究を行っています。

学生が未来のエコビジネスを開く

＜研究・活動名＞環境とビジネスのバランスを感受した学生を輩出するための研究・活動

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 関谷弘志
早稲田大学学生環境NPO環境ロドリゲス em factory

環境配慮型のビジネスモデルの構築や、環境とビジネスのバランスを感受し、実感と考え方を持ち合わせる学生人材を輩出することを目指し、全国学生環境ビジネスコンテスト em factory 2009 の開催準備や若い人をターゲットにした環境感受性の分析を行いました。

右ページ写真 上：学内省エネプロジェクト資料（小野田プロジェクト）
中下：全国学生環境ビジネスコンテストの様子（関谷プロジェクト）



環境と経済・雇用の問題を同時に解決する

欧米各国は米国のオバマ大統領が打ち出した「グリーン・ニューディール政策」に協調して取り組んでいます。同政策は、自然エネルギーの開発や、環境対策を雇用に結び付け、経済の活性化を図ろうというものです。

ヨーロッパの国々は、自然エネルギーの推進や環境対策の面で、日本よりも進んでいます。

例えば、ドイツには自然エネルギーで発電した電力を電力会社が高く買い取ることを義務付けた「フィード・イン・タリフ（FIT）」と呼ばれる制度があります。日本は元来、環境対策やエネルギーに関する技術は非常に進んでいるので、今後はこれらをビジネスに転換できるような政策を推進していくべきだと思います。W-BRIDGEにおいても、環境経営やエコビジネスの創出についての研究・活動が実施されており、大きな成果を生み出すものと期待しています。

早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授、W-BRIDGE 運営委員 勝田正文

W-BRIDGE へのメッセージ

私は、いわゆる「ゼネコン」に勤務していましたが、建設業はいろいろな意味で、地域や環境と密接な関係があり、社内で地域との交流プロジェクトに携わる中で、地域の様々な活動主体同士の連携が必要だという思いに至りました。今は、新宿区他で、NPO法人新宿環境活動ネットを中心に、地域の事業者、学校、行政、区民の皆さんとともに環境活動を作り上げる仕事に従事しています。

私自身早稲田の出身者であり、W-BRIDGE プロジェクトに大きな関心を寄せるとともに、その中のプロジェクトに参画しています。早稲田の「在野精神」が十分発揮されるのは、まさにW-BRIDGE が目的とする学と企業と地域の連携というステージであり、そこから学びとれるものは無限だと考えます。とくにこれからの時代を担う学生の皆さんには、日本いや世界の縮図ともいえるこの新宿区に思い切って飛び込んでほしいと思います。

新宿エコ事業者連絡会会長 落合千秋さん



em factory の全国学生環境ビジネスコンテストに関わらせていただきました。廃棄物業界に従事する私たちは日々の仕事に追われ新しいニーズを探ることが難しい現状があります。その中で em factory にに関わり、若い人を中心とするニーズを探っていくことでこれからの本当の環境のニーズを先取りしていきたいと考えています。

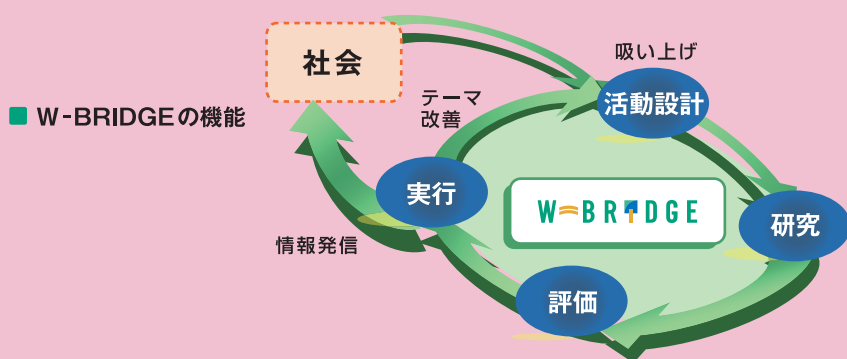
現在は一般の方の環境に対する意識は高まってきましたが、いまだ廃棄物業界へはあまり人材が流れてこない現状です。学生をはじめとする大学やNPOの方々には廃棄物業界をはじめ、環境型のビジネスを展開するところへ優秀な人材がいくような流れを作ってほしいと思います。そうした流れができていくことで本当の環境への取り組みができていくのではないかと考えています。そういう意味で、W-BRIDGE プロジェクトには大学、企業、NPOの連携をうまくとっていくことで、環境型のビジネス分野へ多くの人材が来てくれるような世の中の流れを作ってもらうことを期待しています。

白井グループ株式会社 代表取締役社長 白井 徹さん

ハイレベルの情報を世界へ発信していく

代表代行 堀尾正毅

環境や地球温暖化対策に向けたこれまでの取り組みでは、専門家による環境観測やデータ解析、あるいは先端的な技術開発だけが重視される傾向がありました。これからますます重要になるのは、問題解決のために、適正な技術を選んで、生活や社会の仕組みを総合的に作り直していくような、市民・大学・産業界の連携した研究や実践活動を作り出していくことでしょう。W-BRIDGE プロジェクトはまさにこの部分に重きを置いたものです。これからは、石油漬け社会からの脱却を目指し、W-BRIDGE の総力を挙げて、分野横断の学術・啓発誌「BRIDGE」の発行など、ハイレベルな情報を世界に発信する取り組みを進めたいと考えます。



ブリヂストンがW-BRIDGE に期待すること

株式会社ブリヂストン 環境推進本部長 平田 靖

W-BRIDGE では企業単独の環境活動あるいは特定の技術開発等狭い範囲の産学連携では決して得ることの出来ない成果をともに追求していきたいと考えています。産と学の視点だけでなく、生活者や地域の視点を重視した活動の推進に積極的に参画することにより、当社としても様々な要素を吸収し、ゴム農園と生物多様性のバランスといった課題、環境活動を推進するための指針や仕掛け作り等、環境経営活動に活かしていきたいと考えています。

★第3領域、第4領域の新規採択案件

以下の4つの研究・活動が2009年7月から新たにスタートしています

第3領域：2件

- 学生ボランティアと地域活性化による環境保全の連携に関する研究
(早稲田大学・加藤基樹／WAVOC 公認 まつだい早稲田じよんのびプロジェクト)
- 排出量取引が企業の環境経営及び企業価値形成にもたらすインパクトに関する実証的研究 (山梨大学大学院・長谷川直哉／日本感性工学会価値創造部会)

なお第4領域では、プロジェクト全体の情報発信機能を担うものとし、学術誌「BRIDGE」の発行準備をはじめ、さまざまな情報発信活動を実施しています。

第4領域



「地域と世界を生き生きと つなぐ環境情報の架け橋」

(環境情報の世界発信を通じた日本および各地域
の共時的精神空間の形成)

この領域は環境に関する情報を世界へ効果的に発信し、コミュニケーションする手法を考えることを目的としています。

日本の知恵を世界に

＜研究・活動名＞「持続性の知恵」の国際的展開を目指した環境コミュニケーション手法開発のための基礎的研究

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科准教授 納富 信
特定非営利活動法人環境文明 21

コミュニケーション手法を用いて世界の「持続性の知恵」を統合し、普及させることで、「知恵の架け橋」を築くことを目指し、本プロジェクトでは、日本の「持続性の知恵」のwebコンテンツの作成、フォーラムの試行的開設と運用、基礎情報の整理を実施しました。

思想、価値観、感性の面での世界貢献を果たす土台作りのためには、いくつかのハードルを越えることが必要となることがわかりました。

環境と日本を考える

＜研究・活動名＞早稲田環境塾のコンテンツを世界に発信する手法及びその評価の研究

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院アジア・太平洋研究科教授 天児 慧・原 剛
日本環境ジャーナリストの会

環境情報の世界への発信が急務となっており、「早稲田環境塾」で取り上げられた題材を加工し国内外に発信します。この際コンテンツの選択、加工法、伝達法を①国内外に関心をもたれるもの、②効果的な発信につながるか、の2つの要素から検証することによってよりよい環境情報の発信法を確立するのが目的です。

現在は特に急成長を続け、人口比でも経済力比でもその地位を急速に上げている中国、韓国を主な対象として様々な検証を実施しています。現場からのメッセージを自分なりに感じ取り、本当の「環境」を実感する。「まさに現場から学ぶ」に嘘はないのです。日・中・韓の環境NGOやジャーナリストの交流会を開いています。普通と違うところは早稲田環境塾では交流セミナーを山村で行っていることです。ここでも現場を通して考えるということは一貫しています。現場を通して得た成果を日・中・韓のメディアを通じて、配信しています。

W-BRIDGE の特徴は、学生が積極的に参加していることでしょう。研究・活動メンバーでもある学生が、W-BRIDGE の堀口代表（早稲田大学副総長）に本プロジェクトの意義などをインタビューしました。

Q W-BRIDGE の意義は？

大学はひとつの大きな組織ですが、大学だけではできないことがたくさんあります。今回、株式会社ブリヂストンのご配慮で企業と大学が連携して民間団体の方々、学生の皆さんと協力し合うプロジェクトが実現したことに感謝しています。

Q W-BRIDGE に学生が参加する意義は？

早稲田大学では、教育、研究はもちろんのこと社会貢献を重要な柱に位置づけています。平山郁夫記念ボランティアセンターを中心に、活動が展開されており、多くの大学や企業が関心を示しています。W-BRIDGE においても、学生の参加によって、プロジェクトの幅が広がり、学生の勉強にもなることを期待しています。

Q W-BRIDGE にかかわる人たちへの期待は？

学生のみならず、このプロジェクトに参加していただいている皆さんにお願いしたいことは、自信を持って積極的に情報を発信して欲しいということです。メディアでも自分たちで作る印刷物でもかまいません。私たちもその支援に全力を尽くしたいと考えています。

Q W-BRIDGE の今後の課題は？

課題はいろいろあります。たとえば、W-BRIDGE は大学教員と民間団体、学生の連携で応募してもらい、審査を通じて研究・活動を選択していますが、大学教員が多忙であったり、相互の意思疎通が足りなかったりするケースも見られますので、この点は改善していかなければと思います。

W-BRIDGE では、活動設計→研究→評価→実行のサイクルと社会への情報発信を万全なものとするために、下記の活動を行っています。

- ・ 効率的な個別研究のための情報の収集及びテーマ設定、評価指標の開発と評価実施
- ・ 個別研究委託の成果のとりまとめ支援
- ・ シンポジウム・研究発表等イベントの開催
- ・ 組織的な情報発信
（公開講座、学術誌「BRIDGE」、研究レポート等情報発信体制の整備）

◆執行組織（運営委員兼任）

代表	堀口 健治（早稲田大学副総長）
代表代行	堀尾 正毅（早稲田大学）
副代表	平田 靖（ブリヂストン）
事務局長	永井 祐二（早稲田大学）
研究マネジメントチームリーダー	岡田 久典（早稲田大学）
研究員	中島 勇介（ブリヂストン）

◆運営委員

永田 勝也（早稲田大学）
勝田 正文（早稲田大学）
碓井 俊一（ブリヂストン）





おわりに

W-BRIDGE ってどんなところ？

W-BRIDGE に出会ってから知らぬ間に
世界が広がっていました。

W-BRIDGE にはたくさんの宝物がつまっています。
笑顔、自然、生命、歴史、暖かさ

これらの宝物が人と人をつなげていき
それは世代を超えた深い絆を生み出していました。

環境に対する取り組みを通じて環境という存在の可能性
人間の可能性について触れることができました。
私たちの環境への取り組みではどうしようもできない
遠い存在であると思っていた場所へと連れて行ってくれました。
W-BRIDGE はまさに環境界の架け橋です。

今年も、W-BRIDGE からまかれた種は芽を出し
日光を浴びながら成長していき
やがて、それぞれが、未来へつながる立派な橋となっていくでしょう。



W=BRIDGE

「W」と「B」の間の二重の線、ここに「二つの架け橋」の思いを込めました。つまり、産学の架け橋、そして、生活者との架け橋、の二つを表しています。また、「I」の部分は、環境保全の代表的な対象である「木」のイメージ、そして、青い部分が「地球」を表しています。

私たちは、地球環境分野において、従来の産学という連携に加え、地球に生活している人々をも結ぶ二つの架け橋、名前の通り、ダブルブリッジになりたいと考えているのです。



W-BRIDGE

‘09 年度活動報告



2009 年 11 月 28 日発行

発行 早稲田大学環境総合研究センター W-BRIDGE

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町 513

早稲田大学研究開発センター 3-102

TEL:03-5292-3526 FAX:03-5292-3527

E-mail : w-bridge@list.waseda.jp

URL : www.w-bridge.jp/

制作 W-BRIDGE

協力 國分淳代、松元貴志、西尾ゆかり

2009 Printed in Japan © W-BRIDGE